

校長室から

校長室だより 第10号
令和4(2022)年3月18日発行
文責 宮城県宮城野高等学校
校長 佐藤 誠



昨日は、3月16日(水)23時36分頃に福島県沖を震源として震度6の大きな地震が発生したことによって、JR各線・仙台市地下鉄も始発から運休となり、本校始め県内のほとんどの高校が臨時休校となりました。また、報道では死者4名(宮城3名・福島1名)・負傷者200名以上とのことですが、生徒の皆さんは大丈夫だったのでしょうか。先週3月11日に震災11年目を越えたばかりのタイミングで、また大きな地震に見舞われると、なぜこの時期なのかと疑問がわいてきます。新幹線が脱線したり、高速道路に亀裂がでたり、復旧するまでには時間がかかりそうですが、震災の記憶を思い起こし、緊急時対応備品の備えを確認し、そして何よりこころ構えをしておく必要があるとあらためて感じました。

<第25回卒業式を挙行!、25回生が旅立ちました>

3月1日(火)に、「令和3年度第25回卒業証書授与式」を挙行しました。昨年度に続き、1・2年次生の参列なし、来賓限定、そして卒業生保護者家族も1名限定として開催しました。そこで披露された、在校生送辞と卒業生答辞の内容がとても素晴らしかったので、同席できなかった1・2年次生徒の皆さんにもぜひ共有して欲しいと思い、両方をこの「校長室だより」に掲載します。一読ください。

<在校生「送辞」>

まずは、在校生送辞です。在校生代表として、23Hの宮林春瑠さんが読み上げました。

令和3年度卒業式 在校生送辞

暖かな春の日差しが、草木を冬の眠りから目覚めさせ、生命の息吹が感じられる季節となりました。この佳き日に宮城野高校を巣立って行かれる先輩方、ご卒業おめでとうございます。在校生一同、心よりお祝い申し上げます。

大きな期待を胸に抱き、この宮城野高校に入学された日から、今日に至るまでのたくさんの思い出が、この学び舎に刻み込まれていることと思います。私達在校生にとっても先輩方と過ごした日々はかけがえのない時間でした。

先輩方は、私たちに宮城野生としての在り方を教えてくれた存在でした。私たちは、コロナ禍の中、入学してきました。行動が制限され、お互いにどのようにコミュニケーションをとればいいのかかわからない日々でした。そんなとまどいの中にいる私たちに、先輩方は宮城野生として積極的に声をかけてくださいました。こうした先輩方のさりげない気遣いに羨望の念を抱くと共に、ようやく自分も宮城野高校の一員になれたのだという、喜びにも安堵にも似た思いがこみ上げてきたことを、今でも鮮明に覚えています。

宮城野高校は「自主自律」を重んじる学校であると言われていますが、こうした一人ひとりの相手を思いやる行動があるからこそ成り立っているのだと、先輩方の行動から学ぶことができました。

昨年度は様々な学校行事が中止となり、その中心として活躍するはずだった先輩方は大変悔しい思いをされたことだと思います。先輩方のその思いを引き継ぎ、今年度の文化祭や体育祭は私たちなりに頑張りました。昨年度、先輩方と共に行事を作り上げる機会がほとんどなかった私たちは、気合いとは裏腹に空回りしてしまうことが多々ありました。しかし、その度に先輩方は「自分た

ちのやり方でいいんだよ。今まで積み重ねてきたことを信じれば大丈夫。」と私たちを優しく導いてくださいました。文化祭当日も、私たちが行き届かなかったところにまで目を配り、フォローしてくださいました。今年度の文化祭や体育祭の成功は私たち在校生だけではなく、先輩方の協力があってこそ生まれたものです。本当にありがとうございました。これからも、宮城野高校の伝統を絶やさず引き継いでいけるよう、在校生一同頑張っていきます。

先輩方の卒業にあたり、私の好きな作品の作者、荒川弘さんの「痛みを伴わない教訓には意義がない。しかし、その痛みを耐え、乗り越えた時、人は何ものにも負けない強靱な心を手に入れる。」という言葉を送ります。先輩方は「当たり前」が当たり前でなくなった社会の転換期を、この高校生活の中で経験してきました。これを乗り越えてきたことは、この先きっと先輩方の大きな力となるはずです。私たちは、先輩方が朝早くから教室や図書室で勉強に励む姿、何事にも全力で取り組む姿を見て大きな刺激を受けてきました。今後それぞれの道を進まれる先輩方、ますますパワーアップした姿を私たちにを見せてください。そして、挫折そうになった時には、共に過ごした宮城野の仲間たちや、いつも応援してくれている家族や先生方の笑顔思い出してください。

先輩方と、もっと多くの時間を共に過ごしたかったのですが、とうとう送別の時が来てしまいました。今まで本当にありがとうございました。最後になりましたが、先輩方との出会いに感謝し、これからのご多幸と更なるご活躍を心よりお祈り申し上げ、送辞といたします。

令和四年三月一日

在校生代表 宮林 春瑠

この「在校生送辞」は、代表として宮林春瑠さんが読み上げてくれましたが、実は原稿を推敲するときに、4人の生徒の皆さんが言葉や意見を出し合ってまとめたものだそうです。そのメンバーは、宮林さんの他、22H荒 虹璃さん、23H船渡理紗さん、24H鳴戸結依さんです。卒業式に参列できなかった1・2年次の生徒の皆さんに代わって、卒業生に送る様々な気持ちをつなぎあわせ、一つにまとめた心のもった送辞であったと感じました。4人の生徒の皆さん、ありがとうございました。

<卒業生「答辞」>

そして、卒業生答辞です。卒業生代表として、37Hの櫻井真歩さんが読み上げました。

令和3年度 卒業式 卒業生答辞

冬の寒さも和らぎ、春の訪れが感じられる今日のよき日に私たち三年生一同は、無事に卒業の日を迎えることができました。本日はご来賓の皆様、保護者の皆様のご出席のもと盛大な卒業式を挙げて頂きますことを卒業生一同御礼申し上げます。

思い返せば三年前、慣れない真新しいスーツに身を包み、高校生活への期待と不安を抱きながら入学しました。一年次のときには、クラスメイトと打ち解けあうことができた泉ヶ岳での宿泊研修をはじめとし、先輩方の派手な仮装に衝撃を受けた体育祭、約二四〇〇人が訪れた完成度の高すぎる文化祭など、何もかもが新鮮でとても刺激的な日々を送りました。様々な行事を通して、先輩方の姿から主体性・自主性を重んじる宮城野生らしさを感じることができました。そして、二五年の歴史を受け継ぎ次は自分たちが中心となって今まで以上に素晴らしい宮城野高校を創り上げていきたいと思うようになりました。

しかし、進級後の生活への期待を膨らませていた二〇二〇年二月、私たちの高校生活は一変しました。新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言によって休校が余儀なくされ、六月からという異例の新学期を迎える事になりました。授業やサークル活動には様々な制限がつき、私たちが楽しみにしていた体育祭や文化祭、宿泊研修などの行事は全て中止となりました。どうして私たちは普通の高校生活を送ることができないのかと行き場のない怒りや悔しさを感じました。そして、このまま高校生活が終わってしまうのではないだろうかと漠然とした不安が大きくなっていきました。ですが、私は、この期間があったからこそ得られた学びや成長があったと感じています。毎日学校に行き、授業を受け、友達と一緒に弁当を食べたり、くだらない話をしながら笑いあったりするという、それまで当たり前だと思っていた生活ができなくなった一年前。想像もしていなかったコロナ禍での生活を通して、当たり前の生活を送れることが

どれほど幸せで、大切な時間だったのかを実感しました。そして、自分がどれほど周りの人たちに支えられていたかに気付くことができました。

在校生の皆さん。昨年は体育祭や文化祭の企画から運営まで本当にありがとうございました。最後に宮城野高校らしい行事を楽しむことができてとても嬉しかったです。行事の運営は皆さんにとってゼロからのスタートで、とても大変だったと思います。その経験から学んだことを活かし、皆さんが創り上げた新しい宮城野高校らしさをこれからも引き継いでいってください。

先生方へ。先生方も苦難の年だったと思います。例年通りの活動ができない私たちのために、代替行事や年次レクリエーションなどを企画してくださったこと、とても感謝しています。先生方の温かな気持ちがあったからこそ、私たちは多くの壁を乗り越え、成長できたのだと実感しています。

そしていつもそばにいてくれたご家族のみなさん。どんな時も私たちを支えてくれた家族のおかげで今の私たちがいます。今まで本当にありがとうございました。これからは少しでも恩返しができるように努力していきますので、見守っててください。

この三年間、決して楽しい事ばかりではありませんでした。ですが、私たちは多くの人に支えられながら困難を乗り越え、今日という日を迎えることができました。これから私たちは、自分たちの足で新たな進路に向かって進んでいかなければなりません。この宮城野高校で過ごした三年間を人生の糧とし、かけがえのない思い出を胸に、精一杯羽ばたきたいと思います。

最後になりましたが、宮城野高校のさらなる発展と校長先生はじめ諸先生方、皆様のご健康を祈念し、卒業生の答辞といたします。

令和四年三月一日

卒業生代表 三七ホーム 櫻井 真歩

まさしく、コロナと共にある高校生活2年間を過ごしてきた卒業生の皆さんの、やり場のない複雑な思いがにじみ出る内容だと思いました。1年次の時の、にぎやかで趣向を凝らした各種行事を体験しているからこそそのギャップの大きさは、計り知れないものがあると思います。しかし、それでも前を向き、後輩たちに後を託す願いもまた伝わる内容だと思いました。1・2年次の生徒の皆さん、このような気持ち溢れる卒業生の答辞を、直接聞いてもらうことはできませんでしたが、この文章を読むことでしっかりと胸に刻んで、次につなげていって欲しいと願っています。

また、卒業生に申し訳なく感じていることがあります。それは、校歌合唱の場面を作ってあげられなかったことです。できれば卒業式で、と考えていたのですが、県内の感染者数の推移を見たときに、やはり実施は難しいという判断を下さざるを得ない状況でした。卒業生は、結局2年間の間に、一度も校歌の全体合唱を行うことができませんでした。卒業式前日の、同窓会入会式の際の挨拶で、卒業生の皆さんには、「校歌の演奏CDに合わせて、それぞれのパートを心の中で歌ってください」とお話ししましたが、きっと卒業式当日は、心の中で大きな声で歌ってくれたものと思います。

さて、年度末を迎えています。コロナ、高校入試、地震での休校、とまっとうに1日を過ごせる時間がなかなか確保できていませんが、成績に課題がある人は可能な限りの追加の取組を、高い目標を既に見定めている人は着実な積み重ねを、それぞれ自らに問いかけ、自らの意志を確かめて、目の前の課題に取り組んでいって欲しいと思います。